

竜脚類の下顎の化石の発見

兵庫県丹波市山南町と篠山市には篠山層群（約1億1千万年前）と呼ばれる地層が分布しており、山南町上滝の篠山川の河床にも、この篠山層群が露出しています。2006年8月に、ここから村上茂・足立列両氏により竜脚類（首の長い植物食性の恐竜）の化石が発見されました。それ以来、川の水位が下がる毎冬に発掘調査が6次にわたり行われ、竜脚類の尻尾と胴体の骨、環椎（一番前の首の骨）、脳函（頭骨の一部）、歯が発掘されました。これらはすべて同一個体の竜脚類に由来すると考えられますが、歯は大小さまざまなものが発掘されており、すべてが同一個体に由来するのか、それとも複数の個体の歯が混じっているのか不明でした。この問題は歯が植わっていた顎の骨が出れば解決するのですが、発掘された化石の中には顎の骨は見当たらなかったのです。しかし、今年4月に第1次発掘で掘り出されていた未処理の岩塊の一つをクリーニングしたところ、待望の下顎の骨の一部（歯骨）が出てきました（図）。発掘現場では、破損を避けるために、化石は大部分が岩に覆われた状態で地層から取り出されます。そのため、クリーニング（室内で化石から岩を慎重に削り取る作業）後に初めて何の骨なのか分かることも多いです。今回の下顎の化石はまさにその例であり、当初は重要でない骨の破片に思えたためクリーニングがずっと後回しになっていたのです。

下顎の骨と分かってからは慎重に慎重を重ねてクリーニングを行い、6月に名古屋で行われた日本古生物学会で公表することが出来ました。竜脚類の下顎は6〜7種類の骨から構成されていますが、今回発見されたのは歯が植わっている歯骨と呼ばれる骨で、その後半部分が保存されていました。歯は全部抜け落ちていましたが、歯が植わっていた穴（歯槽）が保存されており、その大きさと並び方から、歯は顎の前の方に偏って生えていたこと、これまで発掘された歯のうち小さなものはこの顎と合わないことが分かりました。恐竜では、使い古された歯は抜け落ち、新しい歯と入れ替わります。山南町上滝の発掘現場から出る恐竜の歯の大部分は、このような、使い古されて抜け落ちた歯です。しかし、今回の顎の発見によって別個体のものと分かった竜脚類の小さな歯の中には、あまりすり減っておらず、使い古されて抜け落ちたとは考えにくいものもあります。こうした歯も遺体の顎の骨から抜け落ちたのだとすると、別個体の小さな竜脚類、つまり子どもの竜脚類の骨が、これまで発掘された化石に混じっている可能性があります。これまで発掘された化石のクリーニングはまだ完了していないので、今回の歯骨につながる頭の骨に加えて、子どもの竜脚類の骨も、クリーニング作業の進展により見つかるかもしれません。

三枝春生（恐竜タスクフォース）



博物館と地域の未来を拓く「ひととはく将来ビジョン」

ひととはくでは「人と自然の博物館の新展開」（平成13年）の取り組みを踏まえ、これまでに、新たな「兵庫県立人と自然の博物館基本構想」（平成19年）及び同「基本計画」（平成20年）を策定し、目標を定めながら活動を展開させてきました。今年は開館20周年の節目にあたって、これまでの成果を振り返るとともに、これからのひととはくが目指すものを示した、「博物館と地域の未来を拓く「ひととはく将来ビジョン」」を描きあげていきます。

ビジョンづくりにあたっては、昨年度末から5回の勉強会を開催するとともに、今年度はひととはく将来検討委員会（熊谷信昭委員長）及び

同専門委員会を設置し、多様な分野の有識者の方々からご意見をいただくとともに、フォーラムやシンポジウムなどの機会を通じて、広く皆さまからのご意見を伺いながら、内容を検討していきます。

このビジョンは、ひととはくの今後のあるべき姿を描くと同時に、日本の博物館の進むべき方向を示唆するものであると考えています。ひととはくは、これからも皆さまとの協働を通じて、博物館と地域の未来について思索し、行動し、提言し続けていきます。

武田重昭（企画調整室）



ひととはく将来検討委員会のようす



- ① オランウータンの子ども
- ② 広大なアブラヤシのプランテーション
(撮影: 高橋 晃)
- ③ 夕闇を滑空するオオアカムササビ
(撮影: 安間繁樹)
- ④ 食事をするアジアゾウの群れ
- ⑤ メンガリスの巨木

第14回ボルネオジャングル体験スクールを終えて

第14回目を迎えた今年のボルネオジャングル体験スクールには、日本から小学校6年生〜高校3年生までの26名とマレーシアのラハダトゥ・サイエンススクールから8名の生徒が参加しました。

例年訪れているダナムパレー自然保護区では、期待どおり、オランウータンの親子やミューラーテナガザルなどの動物たちの野生の姿を観察することができて、スクール生たちは大興奮でした。樹高80mに達するメンガリスの巨木に圧倒されたスクール生もいたようです。

また、今年はダナムパレーに加え、サバ州東部のタピン野生生物保存区を初めて訪れました。原生的な森林が残るダナムパレーとは対照的に、タピンの森林はほぼ全域が伐採後の二次林ですが、周囲を広大なアブラヤシのプランテーションに囲まれ島状に孤立しているため、野生動物にとつての「駆け込み寺」となり、結果的にさまざまな動物の生息地となっているのです。タピンでは、アジアゾウの群れの食事やオオアカムササビが夕闇を滑空するようすを観察するなど、さまざまな動物の生態を学び、貴重な体験ができました。

ボルネオの生き物たちとの出会いを通じ、熱帯雨林の生物多様性とそれを取り巻く現状にふれた実り多い1週間となりました。

上田萌子（自然・環境マネジメント研究部）

